

マイモニデスの属性論 —キリスト教およびカラーム批判の観点より—

神田 愛子
同志社大学大学院神学研究科博士後期課程

要旨

12世紀のユダヤ思想家マイモニデス（1138-1204）は、主著『迷える者の手引き』（アラビア語： *Dalālat al-ḥā'irīn*、ヘブライ語： *Moreh nebukhim*; 1185-1191）の第1部50章から69章において、神の本質と属性の関係について、神の本質は人間には理解することが不可能であり、その属性も肯定的叙述によっては知ることができないと論じている。彼のこのような言説は否定神学と呼ばれるが、その背景には、三位一体を唱えるキリスト教の教義と、神の複数の本質的な属性の存在を認めるイスラーム神学（カラーム）に対する批判が含まれている。本論文では、マイモニデスの属性論の全体を概観した上で、彼がなぜ、どのような方法によってキリスト教とイスラーム神学における属性論を批判していったのかにつき、当該箇所を中心に考察する。

キーワード

マイモニデス、神の本質、属性論、カラーム、否定神学

Maimonides' Theory of Attributes: His Critical Views on Christianity and Islamic Kalām

Aiko KANDA
Doctoral Student
Graduate School of Theology, Doshisha University

Abstract:

Moses Maimonides, a Jewish philosopher of the 12th century, developed his theory of attributes in his philosophical work, *The Guide of the Perplexed* (*Dalālat al-ḥā'irīn*) in part one, chapters 50 to 69. He concludes that man can understand neither God's essence nor His attributes through a positive description of God. His theory is referred to as "negative theology," which includes his criticism of Christian theology and Islamic Kalām, especially on their doctrine of the Trinity and on their theology of positive attributes. On reviewing the relevant chapters in the *Guide*, this essay examines the way in which Maimonides developed his theory of attributes by referring to his critical views on both Christian and Islamic theology.

Keywords:

Maimonides, Essence of God, Attributes, Kalām, Negative Theology

1. はじめに

12世紀のユダヤ思想家マイモニデス（Moses Maimonides; ユダヤ名 Moshe ben Maimon, 通称 Rambam, 1138-1204）¹は、主著『迷える者の手引き』（1185-1191; アラビア語： *Dalālat al-Ḥā'irīn*、ヘブライ語： *Moreh Nebukim*、ラテン語： *Dux neutrorum* ; 以下、『手引き』とする）²の第1部50章から69章にかけて、神の本質と属性の関係について論じており、そこで彼は、神の本質は人間には理解不能であり、神の属性についてもその肯定的叙述によっては知ることができないと述べている。彼のこれらの言説は否定神学とも呼ばれるが、その背景には、三位一体を唱えるキリスト教の教義と、神の本質的な複数の属性の存在を認めるイスラーム神学（以下、カラームと呼ぶ）に対する批判も含まれている。

本論では、マイモニデスの属性論の全体を概観した上で、彼がなぜ、どのような方法によってキリスト教とカラームの属性論を批判し、また彼自身の属性論を構築していったのかにつき、当該箇所を中心に考察する。

2. マイモニデスの属性論の概要³

2-1. 基本的考え方 (I:50-54)

マイモニデスは『手引き』第1部50章の冒頭で、信条を以下のように定義する。「信条 (i'tiqād) とは、発語された考え (ma'nā) ではなく、実際にそれが表象されたとおりに断言された時に、心に表象された考えである」。彼は信条に関して、「それを表象して信じ、またそれに関する知識を求めることなく」断言することは、安易で愚かなことであると述べる。「神は一であるが、複数の本質的な属性を持つ」と語り、キリスト教徒が「神は一であるが三でもあり、三であるが一である」と言うこととは似通っており、それは「神が複数ある」と述べることと同義であるとして、キリスト教の三位一体論だけでなく、実体としての神の属性の存在を主張するイスラームの神学者（ムタッカリムーン）をもあからさまに批判した。

続く51章で、彼は論証不要なものとして論証不可能なものにつき論じている。マイモニデスは、火の熱さや水の冷たさといった、誰にでも自明で知覚可能な、証明を要しない事柄がある一方、神の本質的な属性の存在のような、内的思考でしか存在し得ない、論証不能な事柄があると述べる。本質に付加されたすべての考えは偶有であり、言葉でしか存在しないものは実在しないため正しくない。想像により複数の考えから構成される神は存在しないからである。

次の52章で、彼は「属性の五分類」に言及する。それらは、アリストテレスの『範疇論』などを参考にして書かれたと推測される、「定義」「部分的定義」「特性」

「関係性」「行為」の五つである。この内、神の属性に関しては「行為」の属性だけを肯定し、他の四つの属性については否定している。

53章では、テキストを字義通り外面的意味で捉えることと、実体として属性を捉えることは、神の物体性を否定しつつも様態である属性を本質と見なすことと同義であるとし、アシュアリー派の属性論を暗に批判している。54章では、「神の本質はありのままに理解することはできない」と述べる。結局、現実に現れ出た、人が認知できる神の具体的働きを通してでしか、神を理解することは出来ないということであろう。

2-2. 否定神学 (I:55-60, 65-67)

続く55章から60章と、65章から67章にかけて、マイモニデスはいわゆる「否定神学」に言及する。まず、55章では「神の非物体性」について論じ、神は物性を伴わず完全な存在であるため、いかなる変化や欠乏も生じることはないとする。56章では「神の非類比性」を取り上げ、神と人とは類が異なるため両者の間にはいかなる共通性も存せず、両者は比較不能であるとする。次の57章で、彼は「神の偶有性」を否定する。言葉で表された偶有性の叙述には判断が含まれ、判断には誤りの可能性があり、また偶有には不存在の可能性があるため、絶対的存在である神には適用し得えないからである。さらに、神の存在は必然でその存在には原因を必要とせず、神の存在と本質は同じと見なされることから、神に偶有性は一切存在しないのである。

58章から60章には、いわゆる「否定神学」に関する彼の見解が記されている。否定神学とは、神についての否定的叙述を通して神の理解を増進させ、神の本質に近づこうとする考え方である。なぜなら、肯定による神の叙述には人間の認識に係わるため欠陥が含まれる一方、否定による神の叙述には欠陥の含みがなく、正しい方法と見なされ得るからである。神はただ本質のみを持ち、その本質と神の完全性は一致するが、神の完全な叙述はあり得ないため、肯定的な神の叙述は否定されるのである。

65章から67章には、否定的な神の叙述の具体例が示されている。重要なのは、彼が50章で述べるように、「言葉とそれが指し示すものは必ずしも一致しない」点であろう。この点こそが、彼のいわゆる「否定神学」における中心的課題と言えよう。

2-3. 神の名について (I:61-64)

61章から64章にかけ、マイモニデスは神の名に言及する。彼は61章の冒頭で、神の名はその働きから派生したものであると述べる。例外はヨッド・ヘイ・ヴァ

ヴ・ヘイ (יהוה) で、これは一切派生に淵源しない発語されたもの、すなわち、神の本質を明白に示した名であるが、他の名は神の働きから派生しているため、曖昧さや多義性を含むという。62章では、12文字と42文字で形成される名に触れ、それらの名は複数の名を含むゆえに、必然的に神に関する複数の意味を示唆しているが、神の本質の表象に近いものではあるとしている。

2-4. 哲学的理解 (I:68-69)

68章と69章には、哲学者の描く神について記述されている。彼は68章で、哲学者の描く神とは「知性であり、知性的に認識する主体であり、さらに知性的に認識される客体であって、それら三つの様相が、多性を一切有しない一つの考えを形成する」と述べる⁴。神は一であり、一切付加され得ず、生ける神によってであり、神の命によってではない。神の命は神の本質そのものだからである。人は可能態として知性的に認識する主体であっても、可能性があることと現実にならざることは同じではない。また、知性と形相の関係について言及し、形相とは現実化した知性であり、知性と知性的に認識された形相は独立した二つのものではないと言う。なぜなら、現実化した知性とは、知性的に認識されたものに他ならず、すべて知性においてその働きは本質と同じであり、知性とは理解のことだからである。

次の69章で、彼は哲学者が神を第一原因と呼ぶことを指摘する。哲学者が神を第一原因、あるいは不動の動者と呼ぶのは、すべての事物には原因、すなわち、質料、形相、始動因、目的因の四原因が存するが⁵、神は形相であり、さらに目的でもあると考えられるため、始動因、形相、目的因は同一のものと捉えられるからである。

3. キリスト教神学の影響を受けたイスラーム思弁神学に対する批判

3-1. マイモニデスのカラーム批判

冒頭で「マイモニデスの属性論には、キリスト教とイスラームの神学に対する批判が含まれる」という主旨のことを書いたが、『手引き』の他の箇所でも、さらに具体的な彼の批判的言説があるので、まずその箇所に触れておきたい。

『手引き』第1部71章で、彼はユダヤ教内部における神学的議論には、イスラームのカラーム⁶、特にムウタズィラ派 (al-Mu'tazila) の影響があると述べ、ムウタズィラ派とアシュアリー派 (al-Ash'ariya)⁷の学者間の論争が、実はキリスト教神学の影響を強く受けていることを指摘する⁸。彼らの言説の、特に神の一性などの中心的教義に係わるものは、ギリシアとシリアの、哲学者の見解に対抗して記し

たキリスト教徒の書物から取られた命題を基盤にしていると、マイモニデスは指摘する。哲学発祥の地であるギリシアでは、哲学的な教えが広まり、また受け入れられていたため、キリスト教の教義が哲学的教えと衝突することに気づいたキリスト教学者が、中心的教義に反する哲学者の見解を反駁するための命題を構築したことに、カラームの源があるとされるからである。

キリスト教徒にとって有益かつ論議の基盤となる命題を構築したのは、アリストテレスの註解書を記した、アレクサンドリアのヨハネス・ピロポヌス (John Philoponus, c. 490 – c. 570)⁹や、アリストテレスやプラトンらのギリシアの文献をアラビア語に翻訳した、シリアのイブン・アディー (Yaḥyá ibn 'Adī, 893–974)¹⁰といったキリスト教学者であり、彼らの方法論を利用したのがイスラーム神学者なのであるという。彼らの議論の方法は、派によって細部が異なるとはいえ方法論としては同じであり、想像を用いた見解を知性によるものと称し、自然学に反する命題から論じていると、マイモニデスは批判している。

3-2. ムウタズィラ派とアシュアリー派の属性論の違い

マイモニデスがムウタズィラ派とアシュアリー派の属性論の違いをいかに調停し、彼自身の属性論に繋げたかを論じるのがベロである¹¹。イスラームの教義の中で、特に重視されるのは「神の唯一性」であるが、それは、すべて生成されたものは分割可能である一方、神は創られたものではなく、一切物性を伴わないため、分割不能で永遠に一だからである。では、そのような神はどうしたら表現され得るであろうか。クルアーンや聖書に記された、手足や感情を持つ擬人的な神の叙述を、神性を歪めることなく理解するにはどうしたら良いのであろうか。ベロは、存在論的に神の属性 (ṣifah) を捉えるムウタズィラ派とアシュアリー派の見解の差異を、論理的に捉えることにより調停したのがマイモニデスであるとし、両者の見解の違いを次のように説明する。

まず、ムウタズィラ派の属性論であるが、彼らは「力」「知識」「正義」といった神の属性は、神の本質と一体化したものであるとし、属性が本質から離れた実体であることを否定する。彼らは「神は神の本質によって知る」と述べ、神はそれら個々の属性を本質と共に永遠に持つとした。彼らは「クルアーンは[神によって] 創造されたものである」と論じ、クルアーンに記された神に関する擬人的表現は、手は力、顔は知識、玉座は神の全能性を指すもので、それらすべては比喩的に解釈されるべきだと主張する¹²。

一方、アシュアリー派は「神の属性は神から独立して存在する実体 (ma'ānī) である」と主張する。彼らは「神は神に存する知識によって知る」と述べ、人間の知識が付属的な偶有であるのに対し、神の場合は本質的な属性であるとする。

彼らは、神の本質の属性と働きの属性を分けて考え、本質の属性には、名前と名付けられたものが一致する本質的属性 (nafsīya) と、名付けられたものが類似でも非類似でもない実体的属性 (ma'nawīya) があり、働きの属性には、名前と名付けられたものの間に差異があり得るとする。アシュアリー派は「属性は神と同一ではないが、神以外でもない」と述べ、属性が神から離れた実体であることを強調する¹³。以上から、ムウタズィラ派が神の属性を「神の本質が部分的に現れたもの」とするのに対し、アシュアリー派は「神から離れた実体」とする点に、彼らの属性論の違いがあると考えられる。

3-3. マイモニデスによる両派の見解の調停

ペロは、ムウタズィラ派とアシュアリー派の両派とも、存在するか否かという存在論的側面から属性論を捉えていること、さらに、神と人間の関係を類推することにより属性を語っていると論じ、これと異なる方法で神の本質と属性の問題を考えたのがマイモニデスであるとする。マイモニデスは、第一に、神と人とは絶対的に異なるため一切類比できないこと、第二に、見えるものと見えないものを類比することは論理的でないとし、論理的記述により彼自身の属性論を構築しようとしたとペロは論じる。特筆すべき点は、第一に、属性論と神の唯一性の教義は矛盾しており、神の本質的な属性を信じるのが神の多性を信じることに繋がるとして、彼らの属性論そのものを否定したことと、第二に、属性を文法的に分析し、主語と述語が同じものと、述部が主語の説明あるいは定義であるものに分けて考えたことである。前者の場合、例えば「人は人である」といった文章は、主語と述語が全く同じで単なる重複であるため意味を成さない。また後者の場合、例えば付加された概念の場合、主語を超えたものを指し示すことになるため正しくない。マイモニデスは、アリストテレスの見解から、事物の定義は定義づけられるもの (definiendum) の類 (genus) と差異 (differentia) から成り立つため¹⁴、いかなる類にも属さない神は、人間の言語によっては定義づけられないと論じているのである¹⁵。

4. 論理的な意味の解釈と属性の五分類

4-1. 論理的命題と信条の定義

マイモニデスが、属性論を論理的判断の問題として扱ったことを最初に指摘したのはウルフソンである¹⁶。彼は、マイモニデスが『手引き』第1部52章で論じた「属性の五分類」に注目し、アリストテレスの論理学各書の記述と比較することで、彼が新たに属性論の枠組みを構築したと評価する。

議論を始めるにあたり、ウルフソンは『手引き』第1部50章の叙述に言及する。マイモニデスは「信条とは、発語された考えではなく、実際にそれが表象されたとおりに断言された時に、心で表象された考えである」と述べているが、これは、第一に「発語された」言葉と「心で表象された」言葉が対比され、第二に、「信条」と、外的な現実が呼応する「心で表象された考え」が結び付いたものであると、ウルフソンは指摘する¹⁷。アリストテレスの「祈りは発せられた言葉 (logos) で真でも偽でもないため、論理的命題ではない」¹⁸、という言葉想起させる叙述といえる。

「論理的命題」とは、ウルフソンのアリストテレス理解によると、真偽が存する文章で¹⁹、存在するか否かにより真偽が論証され²⁰、そのような真偽は論証と²¹部分的に帰納により打ち立てられ²²、すべての事柄は論証か帰納による証明に基づく²³とされるものであるという²⁴。以上から、マイモニデスの信条の定義は、アリストテレスの論理学に基づく論理的命題として書かれたものであり、このため、神に関するいかなる言明も、論理的命題として真偽が論証されなければならない、というのがマイモニデスの見解と考えられる。

マイモニデスは、第1部51章で二つの論理的命題について論じており、その一方は、述部が主語の本質に付加されたものを指し示す場合であり、他方は、述部が主語の本質を指し示す場合である。前者の場合、それは偶有で、永続しないものであるが、後者の場合は、主語と同じ意味を持つ語、すなわち語句の説明である。アリストテレスによると、語句の説明には二種類あり、一つは「語が示すものの句」(logos tou ti semainei to onoma)、すなわち「名目的定義」(nominal definition)で、もう一つは「それが何であるかの句」(logos tou ti esti)、すなわち「真の定義」(real definition)であって、後者は、定義づけられたものの原因を指し示す定義²⁵であるという²⁶。二つの論理的命題の内、前者はアリストテレスの名目的定義に合致し、後者はアリストテレスの真の命題に合致すると考えられるが、彼は神に関してはいかなる因果関係も否定するため、結局、神は一切定義づけられないというのがマイモニデスの結論となる。

4.2 アリストテレスの論理学からみた、マイモニデスの属性の五分類

二つの論理的命題を発展させる形で提示したのが、マイモニデスの「属性の五分類」であろう。彼は属性を「定義」「部分的定義」「特性」「関係性」「行為」の五つに分類し、最後の「行為」の属性に関してのみ、神に関して肯定され得ると述べている。

この五分類であるが、マイモニデスはどのように五つに分けたのであろうか。ウルフソンは、アリストテレスの論理学を参考にしたと考え、以下のように考察

する。アリストテレスは『トピカ』において、述語形態を「定義」「類」「特性」「付帯性」の四つに分類しているが、始めの二つは 4.1 で述べた「真の定義」を二つに分けたもので、後の二つは「名目的定義」を二つに分けたものであるとウルフソンは述べる²⁷。五分類の一番目の「定義」は、アリストテレスと同義である。二番目の「部分的定義」は、マイモニデスが「人間は生き物であり、理性的存在である」と例示していることから、アリストテレスの「類」と同等と捉えられる。

三番目の「特性」に関して、マイモニデスはこれをさらに「所有」「能動」「受動」「量」の四つに分類しているが、これは、アリストテレスの『範疇論』²⁸における「所有」「能動」「受動」「量」に対応したものと推察される。なぜなら、マイモニデスの特性の四分類のうち最初の「所有」に関して、彼は「大工」「純潔」「病氣」といった例を挙げるが、これは、「所有」(echein; アラビア語: al-milk、ヘブライ語: ha-kinyan) を意味するギリシア語が、持つ (echo) から派生していることから同義と見なされ、二番目の「能動」は、両者とも「生来的能力」を挙げていることで同義と捉えられるからである。

四番目の「関係性」について、マイモニデスはこれをさらに「場所的」「時間的」「他の事物との関係」に分け、例として「住居」「父と子」「配偶者」を挙げているが、これは、アリストテレスが『形而上学』第 5 卷 15 章において、「関係性」(pros ti) を「能動的と受動的」²⁹「数的関係」「類似性」に分けることに対応され得ると、ウルフソンは推察する³⁰。

4.3 行為の属性の特異性

では、「属性の五分類」の、最後の「行為の属性」はどこから来たのであろうか。ウルフソンは、アリストテレス『範疇論』の 5 章と 6 章にその答えがあると示唆する³¹。命題の述語(名詞、形容詞、分詞)は連結詞 (to esti; 英語の is) によって主語と接続されるが、動詞の場合は述語(もしくは述部)を要しない³²。「属性の五分類」のうち、「定義」「部分的定義」「特性」「関係性」の場合、すべて述部を要するため連結詞が必要となるが、「行為」の場合、述部を要さないため連結詞は不要であり、動詞そのものは「特性」や「関係性」の属性には関係しない。五分類の「定義」「部分的定義」については、神は定義づけられず、また分かつたることがないため否定される。次の「特性」も、神の本質そのものは言い表し得ないため否定され、神はすべてのものを超越していることから「関係性」も同様に否定される。最後の「行為」の属性だけが肯定される理由について、ペロは「我々は神を知り得ないが、この世における神の行為の効果は知っており、また「付加した概念や神の類比性に言及することなく」論理的に神を叙述し得る方法であ

るからと推論する³³。

5. 属性論から見た、二つの相反するプラトンの考え方の調停

ウルフソンは別の論文で、二つの相反するプラトンの考え方の調停を試みている³⁴。一つは「概念は神の思考であり、神の内に存する」³⁵という考え方で、他方は「概念は神の外に存する」³⁶という考え方である。現代の学者は、この差は時代による差異、つまり、プラトンの初期、中期、後期の著作間の差としているが、プラトンの同時代の学者たちは、ある特定の考えが彼の思想を代弁すると考え、それ以外の言説は拒否する方法を取ったため、二つの対立する解釈が同時に成り立つことになった³⁷。それが、概念が「神の内に」あると考えるか、「神の外に」存すると考えるかの問題である³⁸。

これら相反する二つの考え方は、キリスト教神学の観点から見ると、一方は「三位一体」を意味し、他方は「キリスト」を指し示すと捉えられる。というのは、三位一体は三つの不可分な位格が一体性をもって「神の内に内在する」とする考え方で、他方、ロゴスであるキリストが現実に現れ出たとするのが「概念は神の外に存在する」と考えることに他ならないからである³⁹。同様に、イスラームの正統主義神学であるアシュアリー派は、神の外に存する実体が神の名と一致すると捉えるため、「概念は神の外に実体として存在する」という考え方が、イスラームの属性論とされたのである⁴⁰。

ここで考えなければならない点は、キリスト教神学のイスラームのカラームに対する影響である。マイモニデスが『手引き』第1部71章で記したとおり、キリスト教神学はカラームの成立に大きく影響しているが、特に注目すべきは、7世紀のシリアで起きた、キリスト教とイスラーム間の神学論争である。キリスト教の護教学者は三位一体を説明するにあたり、クルアーンの「知恵」「命」「力」といった神の叙述に使われた語を用い、それらは神の外にある実体的存在、あるいはキリストと聖霊の第二、第三の位格を反映したもので、クルアーンにはキリスト教の教義に反する記述はないと弁明し、イスラーム教徒を説得しようと試みた⁴¹。ところが、キリスト教護教学者が「キリスト」と「聖霊」は第一の位格である「神」と同じく神である、と続けて主張したため、それに対抗し構築されたのが、「神の外に存在する実体としての属性」を認めつつ、「それらは永遠に神と共にあり、かつ分離不能である」とすることで三位一体を否定した、アシュアリー派の属性論なのである⁴²。

ウルフソンはさらに、キリスト教正統派に対抗する教派の教えの中に、冒頭のプラトンの考えを反映した教義が含まれると述べる。3世紀にキリスト教の異端

とされたサベリウス主義者（様態論者とも呼ばれる）は、キリストと聖霊は単に神の働きを示したものであるとし、キリストと聖霊が実体として神の外に現れることを否定した。これはプラトンの「概念は神の内に存する」という考え方に合致する。他方、正統派のキリスト教教義においては、三位一体として「概念は神の内に存する」ことと、キリストと聖霊の働きが実体として「神の外に存する」ことが両立している。7世紀のギリシア教父、ダマスコのヨハネスは「現れ出したロゴス」と「内なるロゴス」を区別し、三位の一つのロゴスは実体で、ロゴスの内の善、偉大さ、力などの概念は名のみであるとした。彼は、ロゴスの内なる概念は、実体のない名目上のものであるとしたため、イスラームの属性論の否定につながったと思われる⁴³。

6. アリストテレス的見解と、否定神学の矛盾の調停

マイモニデスの属性論のうち、2-4で示した『手引き』第1部68章と69章の論述は、それ以前の章と矛盾するよう見える。彼は68章で、アリストテレスの『形而上学』第12巻から、「哲学者の描く神とは、知性であり、知性的に認識する主体であり、さらに知性的に認識される客体であって、それら三つの考えが一切多性のない一つの考えを形成する」と述べているが、他方、それ以前の章では神の肯定的叙述を否定しており、両者の記述は、ピネスも指摘するように⁴⁴矛盾するよう見える。この点に関し、両者を矛盾せずに捉える方法を提示したのがカシェルである⁴⁵。カシェルは、知性がそれ自体を認識することと属性を否定することは真逆であり、一方は神を最高位のものとするのに対し、他方は一切比較できないものとするが、神を最高とする考えも、類比不能とする考えも、双方とも一神教に内在する考え方であって、マイモニデスはその両者を、彼自身の神学的方法によって一致させようとしたと主張する⁴⁶。

カシェルのいうマイモニデスの方法とは、聖書やラビによる聖書註解の解釈を、論理的に矛盾のないように解釈するというもので、彼女は例として、レビ記19章2節の「あなたは聖でありなさい」の句を取り上げる。この箇所をシフラのレビ記註解は「離れていなさい」⁴⁷と解釈する。他方、マイモニデスは『戒律の書』で、レビ記の同じ箇所を「すべての悪から離れていなさい」⁴⁸と解釈する。カシェルは、レビ記の「聖であること」を、マイモニデスは悪から離れることで「最も清くなる」の意味で解釈したと解説する。

カシェルはさらに、マイモニデスも高く評価する、ファーラービー（al-Fārābī, c.870-c.950）の記述に言及する。ファーラービーは『有徳都市の住民が持つ見解の諸原理』（*Kitāb fī Mabādi' ārā' ahl al-madīna al-fādila*）の中で、第一原因として

の神の存在を「その存在は最も優れた存在であり、存在の卓越性において最高の種類のものであり、存在の完全性において最高の段階のものである」⁴⁹と表し、さらに「第一者はその実体においてそれ以外のすべてのものと異なる」⁵⁰と述べている。カシエルは、マイモニデスはファーラービーの二つの言説と、神の肯定的叙述の否定を結びつけ、完全で最高であることも、全てのものと異なることも、両者とも比較不能という点では同じであって矛盾するものではないと解したのであり、アリストテレス的解釈と否定神学は調和し得ると結論づけるのである。

7. おわりに

本論文では、マイモニデスの属性論の全体を概観した上で、彼がなぜ、どのようにキリスト教とイスラームのカラームにおける属性論を批判し、その上で、彼自身の属性論を構築していったかについて考察した。彼がカラームを批判するのは、彼らの議論が論理性に欠ける点である。カラームの源は、ギリシア教父が哲学者の教えを反駁するために構築した命題にあることから、彼らの言説が哲学者の見解と矛盾することは容易に推察できる。キリスト教護教学者の方法論を用いたのがイスラーム神学者であり、自然学に基づく命題から論じる哲学者の議論と、「想像による言説を知性によるものと称した」彼らの議論には齟齬がある。つまり、アリストテレス主義者であるマイモニデスは、彼らの議論の内容ではなく、彼らの方法論を批判したのである。

次に、マイモニデス自身の属性論について、第一に、アリストテレスの論理学に範をとった「属性の五分類」について考察した。本論で述べたとおり、マイモニデスの属性論の枠組みは、アリストテレスの論理学各書に拠ったものと推察される。カラームの議論が存在論や認識論的に論じられるのに対し、マイモニデスは論理的あるいは文法論的に属性論を論じているとベロは指摘するが、それはウルフソンが述べるように、アリストテレスの『範疇論』の論理分析の影響が大きいと見られる。第二の、相反するプラトンの考え方の調停については、主にウルフソンの論文に基づき考察した。これは概念が「神の内にある」とする考えと、「神の外にある」とする二つの考え方が対立することを指す。「神の内にある」と見なされるのは、キリスト教正統派では三位一体であり、イスラームのアシュアリー派では神の内的属性であり、ユダヤ教のマイモニデスの見解においては行為以外の神の本質である。他方、「神の外にある」とされるのは、キリスト教正統派ではキリストと聖霊であり、アシュアリー派では神の実体的属性と働きの属性であり、マイモニデスでは神の行為の属性である。マイモニデスは「心で表象できない」キリスト教の三位一体は、単に名のための概念で存在し得ないとし、神の実

体的属性を肯定するアシュアリー派の教義も、キリスト教と同様に名目的概念であるとした。

最後の、アリストテレスの見解と否定神学の矛盾に関して、マイモニデスの属性論の叙述が哲学的見解と否定神学の間で矛盾するよう見えるため、その矛盾をどう捉えるかをカシエルの論文に基づき考察した。カシエルは、レビ記の聖書解釈とファーラービーの論述に基づき、完全で最高であることも、全てのものと異なることも、両者とも比較不能という点においては同じで矛盾するものではなく、アリストテレスの見解と否定神学の間に見える矛盾は解消可能だとしたのである。

以上から、マイモニデスの属性論は、カラムの方法論に対する批判から出発し、アリストテレスの論理学を用いて枠組みを構築したものと理解した。ただし、マイモニデスがなぜ「行為の属性」だけは肯定され得ると見なしたのかについては、検討不十分なままである。今後は、彼の属性論における行為の属性の特異性を研究することで、彼が属性論を構築した目的を探ることとしたい。

註

- ¹ マイモニデスはアンダルスのコルドバ出身で、ユダヤ教ラビの家系である。当時この地域はムワッヒド朝（1130-1269）支配下で、迫害を逃れるため一家はアンダルス南部と北アフリカを流転、モロッコのフェズを経てカイロ旧市街フスタートに定住した。後に彼はアイユーブ朝（1171-1250）の宮廷医となる。
- ² 著作には『論理学』（*Maqāla fī šinā'at al-mantiq*）、『ミシュナー註解』（*Pirush ha-mishnayot*, 1161-1168）、『戒律の書』（*Sefer ha-mitzvot*, 1168-1170）、『イエメン書簡』（*Iggeret Teman*, 1172）、『ミシュナー・トーラー』（*Mishneh Torah*, 1168-77）、『復活論』（*Ma'amar tehiyyat ha-metim*, 1191）の他、天文学、医学、薬学に関する論文がある。
- ³ 邦訳は、Moses Maimonides, S. Pines (trans.), *The Guide of the Perplexed* (University of Chicago Press, Chicago and London, 1963) に基づいた私訳である。
- ⁴ アリストテレス『形而上学』第12巻9章を参照。
- ⁵ アリストテレス『形而上学』第12巻を参照。
- ⁶ イブン・ハルドゥーンはイスラーム神学を「信仰信条を守るために論理的証拠で議論し、教義の点で初期イスラーム教徒や正統派イスラーム教徒の考え方から逸れる異端の革新派に反論する学問である」と定義づけている（イブン・ハルドゥーン、森本公誠訳『歴史序説』第三巻、岩波書店、1987年、946頁。）。
- ⁷ アシュアリー派の教義については、Daniel Gimare, *La doctrine d'al-Ash'arī* (Les éditions du Cerf, Paris, 1990) に詳しい。概要は、塩尻和子「書評：Daniel GIMARET, *La doctrine d'al-Ash'arī*」『オリエント』39-2、1996年、116-122頁を参照。

-
- ⁸ Harry Austryn Wolfson, *The Philosophy of The Kalam* (Harvard University Press, Cambridge, MA, 1976) を参照。
- ⁹ ピロポスは世界の時間的生成を主張し、世界の永遠性を主張する哲学者の反駁に注力した。キリストの中には二つの結合した実体が存するとしたため、後に異端とされた。
- ¹⁰ シリア正教徒のイブン・アディーは、ファーラービーの教師であったユーススから哲学と医学を学び、「神は個を知る」と主張した。
- ¹¹ Catarina Belo, “Mu‘tazilites, Al-Ash‘arī and Maimonides on Divine Attributes,” *VERITAS*, v.52 (n.3) (2007), pp. 117-131.
- ¹² *Ibid.*, pp. 119-120. ムウタズィラ派の属性論に関しては、塩尻和子『イスラームの倫理—アブドゥル・ジャッパール研究』、未来社、2001年を参照。
- ¹³ *Ibid.*, pp. 121-123.
- ¹⁴ アリストテレス『トピカ』第6巻1章を参照。
- ¹⁵ Belo, *op. cit.*, pp. 123-125.
- ¹⁶ Harry Austryn Wolfson, “The Aristotelian Predicables and Maimonides’ Division of Attributes,” in I. Twersky and G. H. Williams (eds.), *Studies in the History of Philosophy and Religion* (Harvard University Press, Cambridge, MA, [1938] 1977), pp. 161-194.
- ¹⁷ *Ibid.*, pp. 162-164.
- ¹⁸ アリストテレス『命題論』4章、17a、4-5。
- ¹⁹ 前掲書、4章、17a、2-3。
- ²⁰ アリストテレス『形而上学』第4巻7章、1011b、27。
- ²¹ アリストテレス『分析論後書』第1巻2章、71b、17-18。
- ²² 前掲書、第2巻5章、91b、34-35。
- ²³ アリストテレス『分析論前書』第2巻23章、68b、13。
- ²⁴ Wolfson, *op. cit.*, p. 164.
- ²⁵ アリストテレス『分析論後書』第2巻10章、93b、39。
- ²⁶ Wolfson, *op. cit.*, pp. 165-166.
- ²⁷ *Ibid.*, pp. 175-176.
- ²⁸ アリストテレスは『範疇論』4章で、語の意味を「実体」「量」「質」「関係」「場所」「時間」「位置」「所有」「能動」「受動」の、10のカテゴリーに分類している。
- ²⁹ 『自然学』第3巻1章(200b, 30)では、「能動的と受動的」に対応するものとして、「動因と受動因」という語を用いている。
- ³⁰ Wolfson, *op. cit.*, pp. 178-182.
- ³¹ *Ibid.*, pp. 188-191.
- ³² マイモニデスは『論理学』3章の中で、分詞には時制が含まれる点に言及しており、ここでの動詞は原形のみを指すと捉えられる。
- ³³ Belo, *op. cit.*, p.127.
- ³⁴ Harry Austryn Wolfson, “Extradeical and Intradeical Interpretations of Platonic Ideas,” *Religious Philosophy: A Group of Essays* (Harvard University Press, Cambridge, MA, 1961), pp. 27-68.

- ³⁵ プラトン初期の思想とされる。
- ³⁶ プラトン『ティマイオス』28A、29A、52B（後期対話篇）。
- ³⁷ ハンス・クレーマーは「初期および中期の対話篇では、倫理的政治的テーマを有する実践哲学的側面が優勢であるのに対して、第一哲学および形而上学のより理論的な問題は、広範囲にわたって口授に取って置かれている。他方、次第に覚え書き的効用をより多く意図された後期著作においては、その関係はより複雑である」と述べており、プラトンの思想は単純に二分できるわけでないと考えられる（ハンス・ヨアヒム・クレーマー、岩野秀明訳『プラトンの形而上学』上巻、世界書院、2000年、124-125頁。）。
- ³⁸ Wolfson, *op. cit.* (1961), p. 28.
- ³⁹ *Ibid.*, p. 42.
- ⁴⁰ *Ibid.*, p. 49.
- ⁴¹ アッバース朝第三代カリフ、アル・マフディとの神学対話の中で、ネストリウス派司教テモテー世は、三位一体を「光が太陽から生まれ、言葉が魂から生まれるように、御言葉であるキリストは神から生まれる」、「王が言葉と霊と共にあり、太陽が光と熱と共にあるように、神は御言葉と聖霊と共にある」と表している。彼らの弁明は、初期のキリスト教神学者がユダヤ教徒に対する弁明に用いた、4世紀のニュッサのグレゴリオスのギリシア語立証集や、3世紀のキプリアヌスのラテン語立証集などから借用したと見られる（Aiko Kanda, “Theological Discourse Between Christianity and Islam in the Early Islamic Period” (MA dissertation submitted to the University of Manchester, 2008)）。
- ⁴² Wolfson, *op. cit.* (1961), pp. 50-51. アラビア語で「属性」を意味する *ṣifāt* は、ギリシア語の *charakteristika* の訳語で、アラビア語で実体を意味する *ma'nāyy* は、ギリシア語の *pragmata* の訳語で、後者は、現れ出たもの、すなわちキリストと聖霊を意味する用語である。これら専門用語の翻訳を通じ、キリスト教の教義がイスラーム教徒に伝わったと考えられる。
- ⁴³ *Ibid.*, pp. 51-53.
- ⁴⁴ Shlomo Pines, “Translator’s Introduction: The Philosophic Sources of The Guide of the Perplexed,” in Maimonides, S. Pines (trans.), *The Guide of the Perplexed* (University of Chicago Press., Chicago and London, 1963), pp. xcvi-xcviii.
- ⁴⁵ Hannah Kasher, “Self-Cognizing Intellect and Negative Attributes in Maimonides’ Theology,” *Harvard Theological Review*, 87:4 (1994), pp. 461-472.
- ⁴⁶ *Ibid.*, pp. 461-462.
- ⁴⁷ Sifra Lev. Kedoshim 1:86.
- ⁴⁸ Maimonides, *Sefer ha-Mitzvot*, Principle 4.
- ⁴⁹ ファーラービー、竹下正孝訳「有徳都市の住民が持つ見解の諸原理」1章1節、『中世思想原典集成 11：イスラーム哲学』、平凡社、2000年。
- ⁵⁰ 前掲書、1章2節。